

第33回院内学術研究発表会

令和3年2月4・5日

1. 当院における言語聴覚療法の現状と課題

リハビリテーション科

○沼田 梨奈 中野 朋子
藤本 智久 岡田 祥弥
行山 頌人 井上 貴博
六山 梓 川合 寛
山上 遼 大道 克己
堀川 晃義 大島 良太
井上 紗希 土屋 栞
中島 正博 森本 洋史
西村 暁子 岡 智子
西野 陽子 皮居 達彦
田中 正道

高度急性期病院での言語聴覚療法のニーズは年々増加し、対象となる患者は全診療科に渡り、業務の細分化も進んでいる。そのような状況において、私たち言語聴覚士は、限られたマンパワーの中で優先順位をつけて、言語聴覚療法が必要な患者に対して早期からもれなく介入することを心がけている。

今回、今後の課題を明確にする目的で、当院における言語聴覚療法の過去5年間の現状調査を行ったので若干の考察を加え報告する。

2. 当院におけるがんゲノムプロファイリング検査の現状と課題

ゲノムカウンセリング室

○谷口 真紀 中川 卓
和仁 洋治 田村 和朗
山本 繁秀 春名 勝也
永谷 たみ 島田 健
村上 陽子 井上 豊子

福井由紀子 伊藤 絢子
藤田 裕子 安東 正子
安井 典子 甲斐 恭平

2019年6月に2種類のがんゲノムプロファイリング検査（以下、がんゲノム検査）が保険承認された。がんゲノム検査の対象は、標準治療がないまたは終了、終了見込みとなった固形がん患者で、かつ検査結果説明後に薬物療法が実施可能であることが予測される患者である。がんゲノム検査の目的は、遺伝子解析結果に基づき効果が期待される治療法を探すことである。そのためがんゲノム検査を受検する患者・家族は、治療候補薬剤が見つかることに期待を抱いていることが多い。しかし実際に治療に結び付く可能性は1～2割程度と言われている。さらにはがんゲノム検査では二次的所見を認める場合もあり、患者だけではなく家族への対応が必要となることもある。

当院では2019年9月から2020年10月までに46人が検査を受検しており、治療に結び付いた人は4人（8.6%）であった。また二次的所見を認めたのは4人（8.6%）であり、そのうち遺伝外来受診者は2人であった。

がんゲノム医療が進歩する中で、地域がん診療拠点病院である当院でのがんゲノム検査の現状を検討したので報告する。

3. 小児科で今年度行った運動負荷心電図検査の検討

小児科

○阪田 美穂 上杉 裕紀
岡田 怜 岡田里枝子

加古 優香 栗林 睦子
白井 佳祐 河南 幸乃
清水 彩香 寺崎 英佑
藤原 絢子 坂田 千恵
中迫 正祥 黒川 大輔
神吉 直宙 上村 裕保
中川 卓 高見 勇一
柄川 剛 五百蔵智明
久呉 真章

運動負荷心電図は不整脈、心筋虚血、運動耐容能などの評価に必要な検査である。当院小児科ではマスター負荷、トレッドミル法を行っている。2020年度に運動負荷心電図検査を受けた患者を検討した。基礎疾患はマスター負荷では心室性期外収縮、トレッドミル法ではQT延長が最も多かった。負荷後の心拍数増加はマスター負荷では軽度だったが、トレッドミル法では高値だった。心室性期外収縮はいずれの検査法でも負荷中あるいは負荷後に頻度が増加した症例はなかった。QT延長はマスター負荷でも運動負荷後のQT時間の延長を確認できた。WPW症候群はマスター負荷ではデルタ波の消失を確認できなかったが、トレッドミル法ではデルタ波の消失を確認できた。検査中に何らかの症状や新たな不整脈を認めた症例はなかった。それぞれの検査の限界やリスクを理解し、目的に応じて検査を選択することが必要である。

4. 最強の胸腔ドレナージを目指して

初期臨床研修医

石村 昂誠

呼吸器外科

水谷 尚雄 田尾 裕之

吉川 真生

背景・目的

胸腔ドレナージは気胸・胸水の治療および開胸術後の管理に必要不可欠である。そしてその目的は主に胸腔内の液体や空気の排出を促すドレナージと排出される内容物の量や性状から情報を得るインフォメーションの二つである。そ

の目的に合わせ多種多様なドレーンが開発されており、それぞれのドレーンの特徴を把握し患者状態にあわせて適切に使用することが求められている。その細かな特徴を今回の実験により示すことで、今後のドレーン管理が適切に行われることを目指す。

方法

組織に見立てたメラミンスポンジに食紅で染色した水を吸収させ、水道水を満たしたパッド内に留置する。スポンジ中央にスリットを作成し、その中にドレーンを完全に埋没させ、 $-50\text{cmH}_2\text{O}$ に設定した持続吸引機にてドレナージを2分間施行する。評価項目は吸引によるスポンジの色調変化及び排液量とする。使用するドレーンは12Frアスピレーションキット、10Frニューモキヤス、6.5mmマルチチャネルドレーンの3種類とした。

結果

排液量が多い順にマルチチャネル、アスピレーションキット、ニューモキヤスの順であった。マルチチャネルは近位側の脱色が最も強く、アスピレーションキット、ニューモキヤスについては両端から均一に脱色された。

考察

排液量についてはドレーンの太さに比例すると考えられるが、側溝のあるドレーンの場合は近位側に強い圧がかかり目的の場所からドレナージできていない可能性が示唆された。

結語

ドレナージ加療中は排液量・性状だけを確認するのではなくドレーン留置位置やドレーンの特徴を把握しつつ適切なドレナージが施行できているかを随時確認する必要がある。

5. 形成外科が意識する顔面のunit理論

形成外科

作道 善行 高田 温行

最所 裕司

形成外科では色調、質感、機能、形態を再現することが重要であり、顔面は特に露出部で目